

敦煌写本「王陵変文」について

伊藤美重子

はじめに

敦煌写本の中に「漢将王陵変」というタイトルを持つ鈔本がある（以下「王陵変文」の通称を用いる）。「王陵変文」は、「陵母伏劍」の故事を脚色したものであり、「陵母伏劍」の故事は、『史記』卷五十六「陳丞相世家」に次のようにある（本稿では原文の引用も常用漢字とする）。

王陵者、故沛人、始為傭豪。高祖微時、兄事陵。陵少文、任氣、好直言。及高祖起沛、入至咸陽、陵亦自聚党數千人、居南陽、不肯從沛公。及漢王之還攻項籍、陵乃以兵屬漢。項羽取陵母置軍中、陵使至、則東鄉坐陵母、欲以招陵。陵母既私送使者、泣曰、為老妾語陵、謹事漢王。漢王長者也。無以老妾故、持二心。妾以死送使者。遂伏劍而死。項王怒、烹陵母。陵卒從漢王定天下。

項羽が漢王側についた王陵を従わせようと、陵の母親を人質にして陵を呼び寄せようとしたが、陵母は陵の使者に漢王は長者であり、自分のために節を曲げるな、漢王に仕えよと言ひ残して、自らの命を絶つという物語である。『漢書』卷四十に王陵伝があり、「陵母伏劍」の部分は史記の記述が踏襲されている。この故事は、漢代の

画像石にも描かれ、⁽¹⁾ 陵母は楚漢の興亡を先見する賢婦、また貞節を重んじた烈女として、班彪「王命論」(『文選』卷五二)にもその記載がみえる。⁽²⁾ また、『蒙求』にも「陵母伏劍」という標題があり、唐代でも人口に膾炙した物語であった。

『史記』では簡潔に記載されていた「陵母伏劍」の話は、「王陵変文」では、かなりの脚色を加えられドラマチックな物語となる。王重民「敦煌本〈王陵変文〉」(『国立北平図書館刊』十卷六号、一九三六)⁽³⁾ は、史記と変文には異なる点が多く、これは史記から変文に至る八百年間の演変の結果であると述べ、史記と変文の両者の違いについて相違点をいくつか挙げ(後述)、これらの相違点は歴史と小説の違いであり、歴史から小説に演変する条件でもあると述べ、更に明清代の『西漢演義』に「知漢興陵母伏劍」の回があり、変文と大筋で一致していることを指摘し、⁽⁴⁾ 元・鍾嗣成『録鬼簿』に、顧仲清撰「陵母伏劍」一本を載せていることから、変文、戯曲、演義へと継承されたとする。また、既に亡佚してしまったが、『史記』『漢書』には取られていない逸話が漢・陸賈『楚漢春秋』載せられ、魏晉六朝以来の雑伝の書などにも変文の内容に符合するものがあつたのかもしれないが、それらの書は現存せず、考察の手立てがないと述べる。

王陵変文は、史記や漢書の歴史書に基づきながら、いくつかの緊迫感、臨場感あふれる場面を加えている。王陵変文は散文と韻文から構成され、先行研究で既に指摘されるように絵画を伴い、絵解きの講談として聞きこたえのある物語であったと推測される。⁽⁵⁾ 唐代では、王昭君の物語が書卷を見せながらの語り物であったことが、李賀「許公子鄭姬歌」、王建「観蛮妓」、吉師老「看蜀女転昭君変」などの詩句から知られている。⁽⁶⁾ 敦煌において、王陵変文もそのような絵解き物語であったかもしれない。本稿では、絵解き講談という観点から王陵変文の内容を検討してみたい。

一 鈔本について

「王陵変文」の鈔本はS五四三七、S九九四六、P三六二七、P三八六七、北京大学図書館蔵本(D一八八)の五点である。S九九四六は欠部が多い存九行の断片で、実際にテキストとして利用可能な鈔本は四点であり、P三六二七とP三八六七は同一冊子で現在では接合されており、今知られている王陵変文の鈔本は三種となる。

各鈔本について①形状と存行数、②題名、首部と尾部(項楚『敦煌変文選注(増訂本)』(中華書局、二〇〇六、以下『選注』)での頁数)、③備考を簡単に記す。変文の引用は欠字は「 」に補い、「 」に誤字を修正する。○は判読不能の字、不確定の字にはその字の下に「？」を付す。

S五四三七

①小冊子、存一〇葉(縦一四×横一三cm、葉六〜八行、行八〜一四字)、存一二六行、首全尾書き止まり。

②首題「漢將王陵変」、「憶昔劉項起義争雄…」(二四一)〜「…楚將(將)見漢將(將)走過、然知是」(二五七)

③首葉(表紙)には「漢將王陵変」の文字が三回書かれ、「開蒙要○」の字、名前の習字がある。

S九九四六

①断片、存九行 ②「○鋪?便事变初、「欠」(二四二)〜「欠」已訖、遠出(以下欠)」(二四八)

③文字の残存状況から一行の字数は二〇字以上と推定され、他の鈔本と形状が異なるようである。

P三六二七+P三八六七

①小冊子、存三五葉(二五、五×一一、五cm、葉五〜六行、行七〜一四字)、第一葉〜三二葉まで王陵変文、首

欠尾全、存三六〇行十題記三行。

②「(前葉欠) 帝洽背汗流。漢帝謂二人曰、…(二四一)〜…王陵在後莫須憂、必拜王陵封万户」(二八〇)。

尾題「漢八年楚滅漢興王陵変一鋪」

③末尾に題記「天福四季(九三九)八月十六日孔目官闔物成写記」。

王陵変文の後に別の文献の書写(「書儀」「壬寅年貳月十五日莫高窟百姓龍鉢略欠闕疋帛状」)あり。⁽⁷⁾

北京大学図書館蔵本 D一八八

①小冊子、存八葉(一五・二×一〇・五cm、葉五〜七行、行七〜一四字)途中に脱葉あり、首全尾欠、存六六行。

②首題「漢將王陵変」、「憶昔劉項起義争雄、…(二四一)〜…項羽帳中、盛寢之次、不覚」(二四八)。

③封面「辛巳年九月宋?白?〇、索子〇、富?〇〇」、封面裏に首題の習字、尾葉に題記あり。

末葉「太平興国三年(九七八)索清子」「安神哥?」「孔目官学仕郎索清子書記耳。後有人誦誦者請莫恠也了也」、「辛巳年(九八二)九月廿日」、「辛巳年九月」

この北大図本について、これに接合する部分の写本(小冊子、六葉)が高井龍氏の最近発表したVictor H.Mari: A Newly Identified Fragment of the “Transformation on Wang Ling” (Chinoperl Papers, No.12.1983) の翻訳「新たに確認された『王陵変文』の一残簡」(『アジア社会文化研究』一三・二〇一二)に紹介されている。Mari氏の論文は未見であるが、高井氏の解題によると「Mari氏が、今からおよそ三十年前に個人所蔵文献に確認された「王陵変文」の調査を行い、その影印・校注を附し、併せて氏の変文に対する見解を簡潔にまとめたもの」であるとい⁽⁸⁾う。高井氏の翻訳にはMari氏の論文から転載した写本の画像が載せられ、非常に不鮮明な部分があるものの、こ

れにより『選注』一五七頁「便請同行。兩盈不知」あたりまでの書写が得られる。

以上、現在判明している「王陵変文」の写本の形状は、S九九四六を除けば、みな小冊子であり、小冊子は個人的なメモや手控えに用いられることが多い。ペリオ本には「孔目官閭物成写記」とあり、北大図本には「孔目官学仕郎索清子書記耳」とある。北大図本の「索清子」なる人物が孔目官であり学士郎（学生）であるのか、孔目官の学士郎なのかは議論のあるところではあるが、それに続く「後に人の読誦する者有れば、請う怪しむことなかれ」と謙遜の辞があることから、別人がこれを読誦する場合が想定されており、これが語りのテキストとして書写された可能性がうかがえる。⁽⁹⁾「孔目官」は文書を扱う役人であり、官員が変文の書写を行う目的に関しては、稿を改めて検討したい。

二 構成と内容

王陵変文は先述のように史記に基づき脚色を加えた物語であり、史記に見える簡潔な「陵母伏剣」の物語は変文ではかなり増幅され、史記にはないエピソードが加えられ、登場人物も増え、筋書きも複雑になり、王陵変文には一つ講談としての体裁が整えられている。

王陵変文は、散文と韻文の組み合わせで一段が構成され、計八段から成る。先行研究が指摘するように、散文から韻文に移る部分には、きまり文句のような表現がみえる。⁽¹⁰⁾ペリオ本には「漢八年楚滅漢興王陵変一鋪」の尾題があり、「二鋪」の語は絵を数える言葉であり、王陵変文は絵を伴って、絵を見せながら韻文が詠じられる。⁽¹¹⁾

まず、各段の散文部分の概要を記し、韻文に移る前の原文を引用する。なお、本稿での王陵変文の引用は、原鈔本（ペリオ本を底本とし、欠落部分は主にスタイン本による）と照合のうえ、『選注』及び黄徴・張涌泉『敦煌

変文校注』(中華書局、一九九七、以下『校注』)を参照する。日本語訳にあたっては、金岡照光「校勘訳注敦煌本〈王陵変〉(一)(二)(三)(四)」(以下、「訳注」)を参照した。⁽¹²⁾

- ①楚への負け戦が続ぎ漢軍は疲弊していた。漢将の王陵と灌嬰の二人は楚への斫宮(きりこみ)(原文の語)を計画、張良に漢王にその旨をつけて辞するよう言われ漢王の殿前に行く。漢王は承諾し二将に弓矢を下賜する。「二将辞王、便往斫宮処。〔從此〕一鋪、便是変初(二将は王に辞し、斫宮に赴く場面、これより一鋪、変の初め)」
- ②二将は楚に到着し、楚の偵察隊(丁腰、雍氏)を避けて陣を取り斫宮の時を待つ。その頃、項羽は胸騒ぎを覚え季布に巡宮を命じる。季布は将士を率い巡宮を開始するが、その中に王陵と灌嬰の部隊も紛れ込み楚宮に侵入する。まず知更官健(夜回りの兵士)⁽¹³⁾を捕らえる。「陵左手攬髮、右手擡刀。頭隨刃落、含血洒流四方。二将斫宮処、謹為陳説(陵は左手に髪をつかみ、右手に刀を振り上げる。頭は刃に従って落ち、四方に血しぶきがあがる。二将が斫宮する場面、そのさま如何にと言えは)」
- ③王陵と灌嬰は斫宮を終え漢へ帰還しようとするが、各々騎兵百騎を率いる丁腰と雍氏が警備をかためている。王陵の計略により丁腰と雍氏の追っ手を振り切る。「兵馬校多、趣到界首。歸去不得、便往却迴、而為転説(楚の兵馬は数多く、楚漢の境まで追ってくる。漢将は逃げのび捕えられず、楚の兵士は引き上げる。そのさま如何にと言えは)」
- ④項羽は鍾離末を呼び、斫宮の被害を報告させた。被害の大きさに項羽は激怒、誰の過失かと問われた鍾離末は丁腰と雍氏の名を挙げる。二将は呼び出され、斫宮は王陵と灌嬰の仕業で、二人にだまされて取り逃がしたが、すべての過失は鍾離末にあると告げる。項羽に呼び出された鍾離末は王陵をおびき出すため兵を率い、

陵母を捕らえようと陵の荘を包围する。「新婦檢校田苗、見其兵馬、斂袂堂前。説其本情処、若為陳説（新婦苗の様子を見に行けば、兵馬を目にし、堂の前で袖を直し、その情景を説く場面、そのさま如何にと云えば）」

⑤鍾離末は王陵の母を捕らえて楚に帰る。項羽は陵母に陵に手紙を書くよう強要する。「嚇協（脅）陵母言云、肯修書詔兒已不。其母遂為陳説（陵母を脅して言うことに、手紙を書いて息子を呼ばぬかと。その母は如何にと云えば）」

⑥霸王は陵母の言葉に激怒、ますます拷問を加える。陵母は苦しみ、天を仰ぎ息子の名を叫ぶ。「心是楚將聞者、可不肝腸寸斷。若為陳説（楚將これを聞き、はらわたちぎれるばかり。そのさま如何にと云えば）」

⑦漢の高祖は王陵からの斫営の知らせがないことを心配し、張良の言により盧縮を軍使として戦書を持たせ營に遣わす。霸王は盧縮との面会の際、盧縮に陵母の姿を見せる。盧縮は返書を受けとり漢に帰り、陵母の捕縛を知らせる。王陵は盧縮を従え楚に向う。楚に着くと予兆を感じた王陵は、盧縮一人を偵察に行かせる。再来した盧縮に陵母は王陵への伝言を託し、息子への手紙を書くと偽り、項羽の剣を借りて自刎する。「陵母遂乃自刎身終、其時天地失瑕之（無）光。而為転説（陵母はそこで自刎して果て、その時天地はわずかな光も失った。そのさま如何にと云えば）」

⑧盧縮は王陵とともに漢に帰還する。漢王は陵母の自刎を知り張良を呼び、太史官に命じて盛大にその霊を祭り、陵母に太夫人の封号を贈る。王陵は天子の前で、髪を振り乱し慈母に哭す。「陵母從楚宮内、乘一朵黒雲、空中慚謝皇帝。祭礼処、若為陳説（陵母は楚宮から、一むれの黒い雲に乗り、空中から皇帝に深謝する。祭礼の場面、そのさま如何にと云えば）」

以上のように、史記の記述に比してかなり複雑な構成になっている。王重民は史記と変文の相違点として次の五点を挙げている。⁽¹⁴⁾

- 一、史記には王陵と灌嬰の斫営の記事がない。
- 二、変文は項羽が陵母を捕縛したのは、鍾離末の策略で斫営の怨みによるもの。
- 三、変文では盧縮を漢使として戦書を持たせて送るが、史記は「陵使」とするのみ。
- 四、変文は盧縮の前で陵母を拷問するが、史記では東に向かつて坐らせて敬意を表している。
- 五、王陵が盧縮を再び楚営に送る場面がない。

王重民の指摘のように、史記に無い「斫営」の場面を加えることで、陵母の捕縛の動機づけがより明確になり、「斫営」の場面は変文の前半の山場となる。⁽¹⁵⁾ 変文は「斫営」で登場する灌嬰や鍾離末、盧縮以外にも、楚側では季布、雍氏、丁腰、漢側では張良を登場させ躍動的な物語に改変している。⁽¹⁶⁾ 王重民は特に指摘していないが、変文は陵母の霊を祭る場面を加えて、陵母伏剣の物語の大団円としていることが大きな特徴である。⁽¹⁷⁾ また、⑦で息子が母からの手紙だと確信できるように自分の髪を切り手紙にいれることを申し出て、項羽の宝剣を借りその宝剣で自刎するというエピソードも、変文独自のものである。

韻文に入るまえの言葉から、各段に付されていた絵を推定すれば、①王陵と灌嬰が高祖から下賜された弓矢を背に斫営に向かう場面、②二将が楚営に斬り込み楚の陣営が混乱する場面、③斫営を終えた王陵と灌嬰が楚軍の追跡を振り切り逃げ延びる場面、④鍾離末率いる兵が陵母の住む茶城村を取り囲む場面、⑤項羽が陵母に手紙を書くよう強要する場面、⑥陵母の言葉に楚将も胸を引き裂かれる場面、⑦陵母自刎の場面、⑧陵母の霊を祭る場面となる。①～③は斫営をテーマとした場面で前半の山場であり、④～⑥は陵母伏剣に至る場面で⑤⑥では気丈

な陵母と霸王項羽の非道さを鮮明にして、⑦のクライマックスにつなげている。そして⑧で大団円する。

王陵変文の鈔本はS九九四六の断片を除けば、みなほぼ同様の小冊子であり、試みに各鈔本でのその段がすべて残る部分について行数を記すと、次のようになる。

スタイン本 ①四一行、②六五行） 北大図本 ①四九行、②七〇行）

ペリオ本 ②六八行、③三五行、④五一、⑤二二行、⑥二四行、⑦八三行、⑧一六行）

①②③の研管にまつわる部分が一四〇〜一五五行、④⑤⑥⑦の陵母伏剣にまつわる部分は一八〇行あり、研管の核が第二段、陵母伏剣の核が第七段であることがわかる。

三 各場面での語りとうた

各段について「絵解き講談」という観点から、語り手の口調が感じられる部分、散文と韻文の表現の特徴について検討する。王陵変文では、散文の部分は登場人物の台詞の部分を除けば、おおむね四言句、六言句が用いられ平仄は厳密には整えられてはいないが、ある一定の語りのリズムがあったと思われる。

(一) 「研管」の場面——臨場感、緊迫感

小隊で行われた「研管」が楚軍に大打撃を与える。研管の場面では、壮大な項羽の陣営と小隊の研管隊のコントラストを鮮明にして、如何にして研管を成し遂げたかを臨場感、緊迫感をもって語る。臨場感、緊迫感はどのように表現されているのであろうか。

緊迫感を高める一つの方法として、前兆、予兆を演出することである。圧倒的な勢力を誇る楚営の中で、項羽

は何か胸騒ぎを覚えていた。第二段に次のような記述がある。

罽(遲)紫離門、探聽更号。玉漏相伝、二更四点、臨入三更。看々則是、斫営時節。項羽帳中、盛寢之次、不覺精神恍惚、神思不安、搔然驚覺、遍体汗流。人是六十万之人、営是五花之営。遭々憊々(簇々)、憊々惶々(焯々惶々)。令人肝胆、奪人眼光。

(王陵と灌嬰は)紫離門のところに留まり、夜の見回りの音を聞く。時を伝えて、二更四つ時と、三更になろうとしていた。まさにこれ、斫営の時。項羽は軍帳で寝入っていると、ふと心うつろとなり、胸騒ぎ。ハッと目覚め、全身に汗したたる。兵士は六十万、軍営は五花の営。兵士は群がり、輝くばかり。人の肝胆をおののかせ、人の目を奪うほど。

嚴重な警備、壮大な陣営の中で、一人不安におののく項羽の姿が映し出される。そして項羽は当直の季布を呼び巡営するように命じる。その命を受けて季布が兵営を回る場面に、中軍の将士との短い会話のやりとりがある。鈔本では話者を記入していない。ここは、語り手が声の調子を変えて演じかけたのであろう。これから起る斫営への緊迫感を高めている。

季布応声唱喏、領三百将士、当時便往巡営。中軍家三十将士、各執闊刃麤刀、当時便唱、来者甚人。季布答、我是季布。縁甚事得到此間。奉霸王巡営。既事巡営、有号也無。季布答曰、有号、外示得。中軍家将士答、裏示、合懼(契)⁽¹⁸⁾。馬門闔地開来、放出大軍。二将弟四隊、挿身楚下。並無知覺、唯有季布、奉霸王巡営。営内並無動靜。

季布は「はい」と答え、三百人の将士を率い直ちに巡営に向かう。中軍の部隊の将士は三十名、各々闊刀や麤刀を手にして、「誰だ」と声をあげる。季布は答え「季布だ。」「何ゆえここに参ったのか。」「霸王から巡

營を仰せつかった。「巡營なら、印はあるか。」季布は答え「印はある、見せよう」と。中軍の將士は答え「中によこせ。よし。」馬門がガアと開き大軍がどっと放たれた。二將（王陵と灌嬰）は部隊を四つに分け楚軍の中に潜り込ませた。何も知らず、季布はただ霸王の命を奉じ巡營をする。兵營内には何の異常もない。楚營に潜り込んだ王陵と灌嬰の小隊は、まず、夜回りの兵士（「知更官健」）を殺害し斫營が始まる。散文はここまでで、戦闘シーンは絵とともに韻文で詠じられる。

羽下精兵六十万、団軍下却五花營

項羽の精兵六十万、陣營は五花の營を敷く

將士夜深渾睡着、不知漢將入偷營

將士深夜渾々と眠り、漢將の營に忍び込むを知らず

王陵擡刀南伴斫、將士初從夢裏驚

王陵刀を振りあげ南へきりこむ、將士はじめて夢から覚める

從帳下来猶未醒、乱煞何曾識姓名

帳より出るもお覚めやらず、騒然として誰が誰だか

暗地行刀声劈々、帳前死者乱蹤横

暗闇に刀を振るう音響き、帳前には死者散乱

項羽領兵至北面、不那南边有灌嬰

項羽は兵を率いて北に至るも、いかんせん灌嬰は南にあり

灌嬰揭幕蹤横斫、直擬今霄（宵）作血坑

灌嬰は陣幕を掲げ縦横に切りこみ、まさに今宵は血の海にせん

項羽連声唱禍事、不遣諸門乱出兵

項羽は惨事に何度も声をあげ、諸門から外へ兵士を出すなど

二將驀營行數里、在後唯聞相煞聲

二將は猛然と陣を脱けること數里、後にただ殺し合う音を聞く

王陵変文にあつては散文と韻文の役割が異なり、散文は絵に描かれた場面に入るまでの解説であり、韻文は絵を効果的に詠いあげる。山場は常に絵で示され、語り手は韻文を時に荒々しく激情的に、時に切々と情感を込めて詠いあげるのである。第三段の王陵と灌嬰が楚軍の追っ手から逃げ延びるシーンで、韻文の結びに「伝語江東項羽道、我是王陵及灌嬰（江東の項羽に伝えよ、我は王陵そして灌嬰である）」と名乗りを上げて、斫營の段は幕

を閉じる。

(二)「陵母伏剣」の場面——陵母と項羽のコントラスト

第四段から第七段までは、陵母伏剣の場面である。その中心は第七段であるが、そこに至るまでの段には、気丈な陵母と非道な霸王が対照的に表現される。

大仰な身なりの霸王が、何十人も兵士に駆り立てられてきた陵母に息子を呼び出す手紙を書けと迫る場面、第五段に次のようにある。

三十武士、各執刀棒、駆逐陵母。霸王親問、身穿金鉀、掲去頭牟、搭箭彎弓、臂上懸劍。駆逐陵母、直至帳前。嚇協(脅)陵母言云、肯修書詔兒已不。

三十人の武士は、各々刀棒を手にして陵母を駆り立てる。霸王は自ら尋問するに、金の甲冑に身を固め、かぶとをもたげ、弓を張つて矢をつがえ、肩に劍をかける。陵母は駆り立てられて帳前に至る。陵母を脅し、手紙を書いて息子を呼ばぬかと。

非道な霸王に陵母は自らの死を決意する。第五段の韻文は、「但願漢存朝帝闕、老身甘奉入黃泉(願わくは漢の朝廷とならんことを、老身甘んじて黄泉の国に向かわん)」の二句で締めくくられる。

第六段にも、非道な項羽の行いが陵母の言葉で語られ、楚兵たちが涙する。

迴頭乃報楚家將、大須婦家着郷土 振り返り楚の將士に言う、必ず家に帰り郷土を想え

一朝兒郎偷得高皇号、還解捉你兒郎母 汝が高祖の印を偷めば、汝の母が捉えられよう

三々五々暗中滯、各々思家繪擬帰

三々五々しのび泣き、それぞれみな故郷を想い帰らんと

諸將相看淚如雨、莫恠今朝声哽噎

將士相見れば涙雨の如く、このむせび泣く声を責めるな

蓋有霸王行事虛

霸王の行いはみな虚し

第七段は盧縮が漢と楚を往復しながら物語が展開し、やや複雑な内容構成のためか、他の段より散文部分が多くなる。この段の死を覚悟した陵母と霸王の会話の場面でも、話者が記されていない。ここも語りの聞かせどころである。

陵母於霸王面前、口丞（承）修書招児。霸王聞語、龍顔大悦。陵母招児、何用咨陳。不用別物、請大王腰間太哥（阿）宝剑。但緣招児、要寡人宝剑、作何使用。前後修書招児、児並不信。若借大王宝剑、卸下一子頭髮、封在書中、児見頭髮、星夜倍程、入楚救母。霸王聞語、拔太哥（阿）劍、度与陵母。陵母得劍、去霸王三十余歩、為報我王知。陵母遂乃自刎身終。

陵母は霸王の前で、呼び寄せ状を書くこと承諾。霸王はそれを聞くと満面の笑み。「息子を呼び寄せるに、何か言うことはあるか。」「他でもございませぬ、大王様の腰の太阿の宝剑をお願いします。」「息子を呼び寄せるのに、我が宝剑が必要とは、何に使うのか。」「呼び寄せ状をいくど書いたところで、息子は決して信じません。もし大王様の宝剑を借り、髪を一束切り、書状の中に入れてば、息子は髪を見て、かならず急いで楚に入り、母を救いに参ります。」「霸王はそれを聞くと、太阿の宝剑を抜き、陵母に渡す。陵母は劍を受け取る。と、霸王から三十余歩退いて、「我が王に知らせよ」と。陵母はそして自刎して果てた。

この後に「其時天地失瑕之（無）光、而為転説」と韻文が始まり、盧縮が王陵と漢王に陵母の自刎と伝言を報

告し、王陵はそれを聞いて、悲痛な思いに我が身を苛み、不孝者の自分を責め、鍾離末への復讐を誓ってこの段は終わる。⁽²⁰⁾

(三) 第八段——賢母と忠臣

第八段では、漢王、盧縮、王陵、陵母の霊が登場し大団円となる。この段の韻文を引く。

嗚呼苦哉將軍母、受氣之心如（茹）辛苦　　ああ苦しきかな將軍の母、生まれてこのかた辛苦を嘗める

寡人何幸得如斯、常得忠臣相借助　　我（漢王）は何と果報者、常に忠臣を得て助けられる

是時王陵哭母説、遙望楚宮青鬱々　　この時王陵は母を哭している、遙かに望めれば楚宮の鬱々とした気

昨日投項為招兒、天下声名無數衆　　（我が母は）項羽に投じて我を招き、天下にその名をとどろかす

王陵在後莫須憂、必拜王陵封万户　　王陵もはや憂いなし、必ず王陵万户の領地を拝領する

最後の段は、賢君漢王と忠臣王陵そして賢母陵母が讃えられ、忠臣を支える賢母の物語に終わる。この漢王に感謝する陵母の霊的一幕を加えることで、教訓的な物語として終結させている。王陵変文の書写者が「孔目官」という役人であったとすると、臣下としての心得を託した物語とみることもできるかもしれない。

おわりに

王陵変文は構成や演出から見てかなり完成度の高い絵解き講談といえる。王重民がすでに指摘するように王陵変文は『西漢演義』と大筋で符合している。『西漢演義』が元曲の顧仲清「陵母伏劍」を踏襲している可能性は高いが、元曲「陵母伏劍」は名のみ残され原本はすでに失われている。王陵変文は史記から西漢演義をつなぐ位置

にあり、中原から伝わった講談のテキストを踏襲するものと推測される。

王陵変文と同じような戦記物語、例えば王陵変文と同じく楚漢の争いをテーマとした捉季布伝文、そして帰義軍節度使にまつわる張議潮変文や張淮深変文などについて、それぞれの語り口を比較検討してゆきたい。

注

- (1) 『金石萃編』卷二十二「武氏石室画像題字」に陵母伏剣の故事がみえ、描かれていたことがわかる。
- (2) 班彪「王命論」に「王陵之母、亦見項氏之必亡、而劉氏之將興也。是時、陵為漢將。而母獲於楚。有漢使來。陵母見之。謂曰、願告吾子。漢王長者。必得天下。子謹事之、無有二心。遂對漢使、伏剣而死、以固勉陵。其後、果定於漢、陵為宰相封侯。」とある。
- (3) 『敦煌古籍叙録』（中華書局、一九七九）また、『敦煌變文録文録』下冊（上海古籍出版社、一九八二）所録。
- (4) 王重民の挙げる版本は劍嘯閣批評本『西漢演義』卷五、第六十回「知漢興陵母伏剣」。
- (5) 金岡照光『敦煌の文学』（大蔵出版、一九七二）、「変・変相・変文札記」（『東洋学論叢』三〇、一九七七）、『敦煌の絵物語』（東方書店、一九八一）など参照。
- (6) 李賀「許公子鄭姪歌」に「長翻蜀紙卷明君、軋角含商破碧雲」、王建「觀蛮妓」に「欲説昭君斂翠蛾、清声委屈怨于歌」の句あり。
- (7) 『法国国家図書館蔵敦煌西域文献』（上海古籍出版社）の標題による。なお、壬寅年は九四二年。
- (8) 栄新江『英国図書館蔵敦煌漢文非仏教文献残卷目録』（新文豊出版公司、一九九四）では、その所蔵者を「潘吉星」としている。
- (9) 「汜孔目学士郎」の肩書を持つ者が書写したテキストとしてS.五四四一「大漢三年季布罵陣詞文」があり、この題記「太平興（国）三年戊寅歲四月十七日 汜孔目学仕郎 陰奴兒 自手写季布一卷」の後に「○須？子、○唱」とあり、陰奴兒が書写したものを、別人が歌っているという場合もある。拙書『敦煌文書にみる学校教育』（汲古書院、二〇〇八）第一

章附載「学郎題記リスト」参照。また拙稿「敦煌の学郎題記にみる学校と学生」(『唐代史研究』一四、二〇一一)に補訂リストを載せた。

- (10) 川口久雄「敦煌変文の素材と日本文学―楚滅漢興王陵変・蘇武李陵執別詞とわが戦記文学」『金沢大学法文学部論集(文学篇)』三、一九五五。金岡照光「王陵」「李陵」変文等について―敦煌本講史類の一側面(『東洋学研究』二、一九六七)

- (11) 注(5)参照。なお、P四五二四「降魔変文画卷本」では、絵の裏には詩の書写がある。

- (12) (一)『東洋大学大学院紀要』一四、一九七八。(二)『同』一五、一九七九。(三)『同』一八、(四)『同』二三・二四、一九八六・九七。なお、これは未完であり、第二段までで終わっている。また、劉瑞明(『漢将王陵変』与『捉季布伝文』校注)(『敦煌学輯刊』二〇〇二・二二)も参照。

- (13) 知更官健については金岡訳注参照。

- (14) 一、史記無王陵与灌嬰斫楚營事。二、変文謂項羽捉陵母、為用鍾離末計、為報斫營之恨、史記僅称「得陵母置軍中」、蓋因其降漢故。三、変文称盧縮為漢使遞戰書、史記僅称「陵使」、未指姓名、但定非盧縮? 四、変文謂項羽在盧縮面前苦辱陵母、史記則称「東鄉坐陵母」、非苦辱、実為尊敬。五、王陵邀盧縮再到楚營一段所無

- (15) 王重民は「斫營」の場面は、『漢書』卷四一灌嬰伝にヒントを得たものではないかと推測している。

- (16) 項楚「選注」は丁腰は「丁公」、雍氏は「雍齒」、鍾離末は「鍾離昧」に付会した人名とみている。

- (17) 川口久雄は、陵母の魂祭りの儀式で終わるのは、王昭君変文と同様であると指摘する。注(10)参照。

- (18) 劉瑞明の校注による。注(12)参照。

- (19) この句は九字であり、なにか衍字が混入したとも考えられるが、韻文の途中で散文的な語り口調になるとも考えられる。

- (20) 変文原文「王陵既見使人説、肝腸寸断如刀割。拳身自撲似山崩、耳鼻之中皆灑血。阿嬢何必到如斯、蓋是逆兇行事拙。倘若一朝漢家興、拳手先斬鍾離末。」